

「性＝生」の“多様性”を生きること

堀 江 有 里

「みんなちがって、みんないい」——あるお寺の本山門前に掲げられた看板のフレーズが、一時期、話題になりました。人間はそれぞれみんな、ちがう。顔もちがえば、名前もちがうし、育ってきた環境もちがう。感じ方もちがえば、生き方もちがう。そして、ちがいがあるからこそすばらしい。モノトーンの世界よりは、カラフルな世界のほうがオモシロイ。多様な生き方、それぞれの個性をおたがいに尊重しあえることは、すてきなことだと思います。

もちろん、仏教だけではなく、キリスト教も、そんな多様な人間のあり方を肯定してきた側面もあります。それぞれがみんな、神から与えられた大切ないのちである、と。だから、おたがいに尊重しあえるように、と。それを「愛」と表現してきた歴史があります。しかし、そのような「愛」を一方では強調しながらも、そのキリスト教が、他方では多くのいのちを否定し、殺してきたことも事実です。

「性」にかかわる問題もそのひとつです。世の中には「男」と「女」がいて、一対一でつがい、「家族」をつくっていくことを、キリスト教は「結婚」というかたちで祝福してきたという歴史をもっています。しかし、祝福という“光”が当たる生き方もあれば、その背後には、かならず“闇”がつくられていきます。そして、そこで排除されたり、抹消されたりする「性」があります。それはその人の「生」そのものを否定していく事柄です。

わたしは牧師として、レズビアン（女性同性愛者）として、1994年から、同性愛者のピア・サポートをはじめました。15年が経ちました。その歳月のあいだには、この世から去っていった人たちも少なからずいます。なぜ、こんなに生きがたい社会のなかに、わたしたちはいるのだろうか。——そんな素朴な疑問をわたしはもっています。この10年あまりで日本社会の状況も（表面上は）大きく変化したように思えます。たとえば、マスメディアに（男性）同性愛者が登場し、また、身体と性自認のあいだに違和感を抱える人々が「性同一性障害」として取り上げられるようになりました。そして、徐々に、「性＝生の多様性」が叫ばれはじめています。しかし、この現代日本にあっても、やはり、先の疑問は拭い去れないままに、わたしの心の奥底にありつづけています。

「多様性」を認め合って生きるというのは、案外、むずかしい。しかし、嘆いているだけでは何もはじまりません。実際に、活動を通して、わたしがこれまで経験してきたことは、むずかしさが横たわっていたとしても、人と人が出会っていくことができる可能性がある、ということです。否定的な側面だけを挙げれば、とすると、後ろ向きに映ってしまうかもしれませんが、“闇”に置かれた存在は、またほかの“闇”に置かれた人々と結び合っていくことができますし、そこから生き延びる力を紡ぎだしていくこともできるわけです。

いろんな人たちがいれば、それだけ価値観がぶつかりあい、誰かの生き方を認めようとすれば、ほかの誰かの生き方が否定されてしまうこともあります。そこで折り合いをつけることはなかなか困難なことかもしれません。でも、まずは、日常のなかで、それぞれが“ちがう”存在だということに気づき、そこから出発してみる——抽象的なことではなく、具体的な〈あなた〉と〈わたし〉の出会いのなかで、ぶつかり合い、対話がはじまっていく瞬間に、わたしは大きな可能性を見出し続けたいと思っています。

（日本基督教団・牧師）